

Title	武田勝蔵著, 「風呂と湯のこぼれ話」
Sub Title	Katsuzo Takeda, A history of Japanese bath
Author	松本, 信広(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1978
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.4 (1978. 3) ,p.99(435)- 99(435)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

武田勝蔵著

「風呂と湯のこぼれ話」(村松書館刊)

松本信広

著者は大正十年「史学」の創刊される頃同人として大変尽力せられた我史学科国史専攻の先輩である。父君が対島宗家と関係があった為同家所蔵文書を利用され日鮮通交史に関する資料を度々発表され、殊に塾図書館所蔵の「宗家信使記録下巻」を利用され「天和信使の東海道往還」を執筆されたりした。塾卒業後、宮内省図書寮に入られ、その後各宮家の編修や学士院、済生会、本塾等の歴史編纂に関係され、また東海大学、武蔵工業大学の教授として育英に勉められた。

同君より少し遅れて塾を出られた法学部出身の中島清一君が会社を止めてから家業の浴場を経営されていたので同君等のすゝめにより「公衆浴場史」の編纂に尽瘁されることになった。宮内省時代から御湯殿上日記などに親しみ、入浴のことに興味を持たれていた氏は、悦んで此新天地を開拓し、先に「風呂と湯の話」を世に問うたが、此度、更に「全国浴場新聞」に連載された随筆を纏め「風呂と湯のこぼれ話」、日本人の沐浴思想発達史」として

批評と紹介

村松書館より刊行されたのである。ばらばらに発表された短文を一つにされたのでまゝ繰返しがあり、やゝ不統一の感がないでもないが、平易で読み易く、肩もこらずに入浴史の大体に通ずる便利さがある。読過して吾人の知らなかったことを新たに教えられることが甚だ多い。「湯女」と云えば女性と思っていたのに最初それはもと僧侶の「湯維那」と呼ぶ名称より起り、入浴に関する一切をつかさどる役僧をさす言葉であった(七〇・七一頁)とか、皇子(皇女)が生れると儀式的に入浴させ、先づ迎湯人という老女官が行列の女官の持った虎の頭を湯面にうつし、次に犀の角で湯をかきまわしたという一事(一〇八頁)など私共にとって実に興味ある啓示であった。過去に於て我國の歴史研究はもっぱら政治外交に傾倒していたが中程経済商業に目をむけたりして、風俗史の方面は比較的に見捨てられていた観がある。入浴の歴史などは、今後いろいろの方面より分析し開拓されるべき必要に迫られている。神代のみそぎの如き水浴した時代から、温浴の習俗を取入れ、江戸期末葉の様に高温も悦ぶ風になり、福沢先生がぬる湯の効用を説いて三田に自ら湯屋を開設したというような入浴史の変遷は興味津々たるものがある。日本民族が何処から来たかという問題の如きこういう方面からも考えてゆかねばならぬのではあるまいか?。どうか著者が今後益々御壮健に後進を指導し入浴史の大成を実現していただきたいものである。

(四三五)

九九